

プロフェッショナル・ライターがやっている

『プロらしく書くための 11 のポイント』 PDF



前田めぐる

Copyright(c) 2018 Maeda Meguru All Rights Reserved.

このファイルの無断転載を禁じます。

2013年に著した 2 冊目の『ソーシャルメディアで伝わる文章術』を出版する前後から、いただくメッセージに「前田さんにメッセージするのに、文章が下手で恥ずかしいです」と書かれる方が多くなりました。いいえ、そんなこと、そんなこと……。とんでもない。

わたしこそ、もともと自分では文章が上手いと**は**思っていないのです。ほんとにホント、普通です。もちろん、書く仕事をされる方の中には、ペンを持てばすらすらと文学的な素養が発露するかのように、感性豊かに文字を綴る方がいます。

わたしの場合、そんなことはなくて、筆力そのものについては、まだまだだなあと、いつも思っているのです。

しかし、それでも職業的に「書くこと」を仕事にして**は**きました。「誰でも話せる、書ける」言葉というものを「報酬」に変えて**も**きました。

それは、コピーライターにとって、文章は「作品」ではなく「商品」だからです。商品をつくる、つまり「ものづくり」には「ポイント」があるのです。

商品として対価をいただける文章を書いてきたわけですから、一般の人より少しは「ほ～」「なるほどお」と思われる書き方のポイントを心得てはいると思います。

たとえば、今お読みのこの挨拶文で赤字にしたところなど、ひと文字の使い方で、印象が変わることに気付かれるでしょう。このレポートでは、そうしたちょっとした技術を『プロらしく書くための 11 のポイント』として明文化してみました。

提案書、企画書、日報、ビジネスメール、ブログ……いまや、書く場面のない仕事を探すのがむずかしいほどです。働く人なら、書くことによって得られる評価が変わるということは痛感していることでしょう。

特に「専門家として強みを発揮する」ためには、文章を書いて考え方を発信することが必須です。

そのために、わたしが日頃仕事で気をつけていることが、少しでもあなたのお役に立つなら、望外の喜びです。

Contents

- 1 文章はテーマが8割
- 2 「こと」「もの」を減らす
- 3 「は」と「が」を使い分ける
- 4 あいまいに終らない
- 5 ツッコミ力を鍛える
- 6 「嫌な言葉」を使わない
- 7 「間違いやすい言葉」を知っておく
- 8 定義を知って使う
- 9 リアリティを大事にする
- 10 陳腐さを避ける
- 11 推敲する

1 文章はテーマが8割

はい、テーマが8割。そうなんです。**テーマさえ決まれば、文章はほとんど書けたも同然**なのです。上手い文章を書きたい人は、「どう書くか=How」というテクニックが気になりがちです。が、実はそれ以前に「何を書くか=What」が大前提。

子供の頃を書く絵日記や作文と違い、大人になってから仕事で書く文章には、「役割」があるはず。ホームページやブログの文章、業界紙などから依頼を受けて書く文章、セミナーを主催する場合のイベントの案内や、パワーポイントの文章。どれも「何を書くか=What」という「テーマ」が重要視されます。セールス文章の場合には、「テーマ=価値」とも言い換えられますね。

情緒的な内容に終始してもよい作文は、文学的素養がちょっとあったり、読書好きであったりする人のほうが得意でしょう。センスや表現力が物を言います。しかし、テーマが重視される「論文」「寄稿文」「セールス文」では、表現の巧拙より論理性や説得力でアピールします。まず「テーマ」という「書きたいこと、書くべきこと」があり「ひきつけて、論理を展開し、納得のいくところに落とし込む」ということさえできればいいのです。

いかがでしょう。もしあなたが何らかの専門家であれば、必然的に「書きたいこと・書くべきこと」が湧いて出てくるのではありませんか。

「そんなことはない！毎日ネタに苦労しているし、パソコンの前でうなっている」。う〜ん。そんなあなたは、「書かない時間の過ごし方」に気をつけてみてください。

書かない時間は、「書くための準備」の時間なのです。

身の回り全てを「テーマを見つけるための情報源」だと考えれば、テレビや新聞、人との会話全てにふれるとき、その受け止め方が変わってくるでしょう。パソコンの前に座っていない「書かない時間」のなかで、普段の「感じて・考える力」を磨いてみてください。

自分を取り巻くもの全てに対して「鋭敏さのレベルを上げること」に気を配ってください。全ての時間が「テーマ」の発見につながります。

1 文章はテーマが8割。「テーマ」発見のためには

書かない時間の過ごし方が大切

2 「こと」「もの」を減らす

あまり深く考えずに文章を書くと、どうしても「こと」が多くなりはしませんか？ 次の2つの文を比べてみてください。

.....

<A> 大人になると、困った**こと**がある。文章を書くときに、「こと」「もの」を使いすぎるという**こと**だ。「何をいい加減な**こと**を言う」と言われるかもしれない。しかし、実際試しに今日あったことを誰かに説明する文章を書いてみると、その**こと**がよく分かる。

 大人になると、文章を書くとき「こと」「もの」を使いすぎる。「何を、いい加減な」と言われるかもしれない。しかし、実際試しに今日あった**出来事**を誰かに説明する文章を書いてみると、それがよく分かる。

.....

原文の<A>の「こと」をすべて撲滅してみたのがです。

「こと」は、現象・行為・性質など抽象的なものをひとまとめにしてしまう言葉で、とても便利です。

しかし「こと」を使うことで、あまり意味のない文をダラダラと綴ることもしばしば。つい使いすぎてしまいますね。<A>は、まわりくどい印象が否めません。のほうが、スッキリしますね。

同様のことが「もの」でも言えます。「こと」が具象的な事柄を指すのに対し、「もの」は具体的な物を指します。これも事例で示してみます。

.....

<A> 箸は、食事を口まで運ぶのに使う**もの**で、茶碗は食事を入れるのに使う**もの**です。

 箸は食事を口まで運ぶために、茶碗は食事を入れるために使う**道具**です。

.....

のほうが具体的で、しっかりした文章であるように受け止められます。

このように、「こと」「もの」が何を示す**ものか**を明らかにすれば、**乱用を防ぎ、最小限の使用にとどめ、具体的な文章に仕上げる**ことができます。

2 「こと」「もの」を減らす。すると

具体性のある、しっかりした文章になる

3 「は」と「が」を使い分ける

少し文章の心得がある人なら「は」「が」の使い分けを心がけているかもしれませんが。しかし、一般的にはまだ「何かが違う」と感じるほどで、くっきり意識している人は少ないので、改めて述べておきます。

<A> 彼女は賛同したが、わたしは「それは違う」と答えた。

 彼女は賛同したが、わたしが「それは違う」と答えた。

誰かが「彼女とわたし」に賛同を促したのですね。しかし、「彼女」と「わたし」の意見は分かれた……。

<A>とでは、のほうが「わたし」が際立っているのが分かります。

<A>では、「彼女はどうかだったか、わたしはどうかだったか」、ふたつの意味が同じ重さです。

しかし、では、どちらからか反対意見が出たことに焦点が当てられています。

「で、彼女とあなたと、どちらが反対したの?」「彼女は賛成しました。が『それは違う』と答えたのはわたしです」と、「わたし」を強調しているわけです。

「は」であればさらりと通り過ぎるところを、「が」を使うことでその行為者を際立たせているのです。

このように、**何気なく混同して使ってしまう「助詞」には、役割があります。くっきり使い分けることで、書き手の意図を示す**ことができます。

たとえば、このファイルの2ページ目で赤く示した「は」「も」も、わざわざ意識して組み入れています。これが、あるとないとで、受ける印象が違うからです。

このように、助詞は、さまざまな語に付きます。そして、その語が後の語にどのような関係するか、あるいは今述べた語にどのような感情を添えるか、書き手の意図を示す働きがあるのです。

他にも行き先を示す「へ」「に」「まで」、場所を示す「で」「に」など、使い分けを把握しておくといくつ助詞があります。折あれば、その違いを調べてみてください。

3 「は」と「が」を使い分ける。他にも

助詞を効かせて、文意を明解にする

5 ツッコミ力を鍛える

4で「結論は自信を持って言いきる」と述べました。

どうすれば、自信を持って言い切れるのか？ その場合、考えぬくことは当然です。自分の狭い範囲だけで、物事を判断しないこと。また、専門家であれば、硬直しない自由な考え方で、常に新しい空気を感じるようにしたいですね。

それによって、クライアントは「〇〇さんなら専門的な考え方はもちろん、最近の事情に詳しく、柔軟な考え方の人だ」とあなたの力量を頼みとするでしょう。

時代を俯瞰し、幅広い視野で物事を見た上での専門的な文章が書ければ、あなたはさらに「頼まれる人」になるはず。

書かない時間は、書くための準備。むしろ、いろいろな人の立場で物を見、さまざまな可能性を考えてみるのです。そうすることで、ひとりよがりの狭い路地に入り込まずにすみます。

<ツッコミ力を鍛えて思考力を高める>

.....

- ・結論に至っても「そうばかりとは限らない」と例外を考えてみる
- ・結論に至っても身近な人に「～という意見をどう思う？」と聞いてみる
- ・結論に至ったら「どんな質問がくるだろう」と考えてみる
- ・自分はこんな結論だが、「あの人はどうだろう」と考えてみる
- ・電車の中吊りに突っ込んでみる
- ・新聞のコラムに「ほんとにそうか」と問いかけてみる
- ・街で見かけた看板のコピーを「もっとよくするには」と考えてみる
- ・新聞の投書欄に反論してみる

.....

日常のさまざまな場面で「もっと違う考え方があるのでは」とことん考え抜いてみましょう。結果として、さらに持論を確かにすることにもつながります。

5 ツッコミ力を鍛える。考えぬくことで

自信を持って言いきる

8 定義を知って使う

普段、何となく言葉を使っていて、おおいに反省することがあります。正確に意味を知らないままに使ったときです。なんとなく分かっているつもりで、疑問を持たずにいたために、突然人から意味を尋ねられて、恥ずかしい思いをすることがあります。

大人になると、そのように、だんだん「知らない」とは言いにくい場面が増えていくのです。また、実際「知っているふり」で対応していることが多いのです。

けれど、「定義」を尋ねられて、正確に答えられることは案外少ないものではないでしょうか。それも、話す場合は仕方がないことですが、書く場合はいくらでも、調べる余裕があります。以前なら辞書をかたわらに置いて調べたようなことも、今ではPCを使って書く最中に、簡単に調べられます。そのわずかな手間を惜しむと惜しまないとでは、大きな差がつきます。

たとえば……

「付度とは」

「インフルエンサーとは」

「フェイクニュースとは」

知っているつमोरの言葉たち。しかし、いったんそれを掘り下げてみると、知らない事が何と多いか。

「団塊の世代とは」正確に何歳から何歳くらいなのか。別名でどのように呼ばれていたのか。どんな思想を持っている人が多かったのか。代表的な有名人は誰なのか。その世代に支持を得た曲はどんな曲か。それをつぶさに知っているのといないのでは、表現の上で大きな差がつきます。説得力が変わってくるのです。

8 定義を知って使う

ちゃんと知っている言葉は、“使える”

【書籍ご購入特典のお知らせ】

●1冊以上お求めの場合

『この一冊で面白いほど人が集まる SNS文章術』（前田めぐる著青春出版社刊）を1冊以上、または『前田さん主婦の私もフリーランスになれますか？』（日本経済新聞出版社刊）とともにお求めいただいた方にはこんな特典 をご用意しています。

<https://www.maedameguru.com/fboff.html/>



●10冊以上お求めの場合



□□□□□□□□□□□□□□10冊以上お求め
いただ 場合は、前田めぐるの □分間を
いずれか 無料でご提供いたします。

Zoom

Zoom

60

HP

SNS

*ご購入は書籍の画像や、レシートなどで確認できれば幸いです。

（喫茶代など実費が派生する場合や、当方よりお伺いし、交通宿泊費実費が必要な場合はご負担ください）ご連絡/お申し込みは、HPのお問い合わせフォームから

<https://www.maedameguru.com/contact/>

引き続き、以下のページで最新情報をお届けします。今後ともよろしくお願ひいたします。

前田めぐるのフェイスブックページ

<https://www.facebook.com/megumaga>

前田めぐるの個人ページ

<https://www.facebook.com/megumaga>

Twitter

<https://twitter.com/maedameguru>

前田めぐる事務所の HP

<https://maedameguru.com>

↑ HP のサイドバーに
独自配信メルマガ『めぐまが』（無料）
LINE@の 登録フォームがあります。

不定期ですが、よろしければご登録くださいね。
今後ともよろしくお願ひいたします。

前田めぐる

ご連絡は、HP のお問い合わせフォームからどうぞ。

<https://www.maedameguru.com/contact/>

前田めぐる

Copyright(c) 2018 Maeda Meguru All Rights Reserved.

このファイルの無断転載を禁じます。

このファイルは、2013 年にリリースし、2018 年に加筆修正したものです